

復興大臣感謝状贈呈

復興庁は、東日本大震災からの復興に向けて陣頭指揮を執った福島・宮城・岩手の3県の元市町村長20人、被災地域で産業復興や地域課題解決に向けて取り組む事業者30団体、震災の記憶と教訓の伝承を続ける語り部67人に大臣感謝状を贈呈すると発表しました。

この感謝状贈呈に、本村から、元首長の一人として菅野典雄前村長(佐須)、事業者として「刃物の館やすらぎ工房」、語り部として菅野クニさん(宮内)が選ばれました。発表を受け、それぞれの足跡を振り返りながら、お気持ちを感じていました。

経験と学びを次世代へ

感謝状の贈呈は、思ってもいなかったことで、驚いたと同時にうれしく思いました。復興への取り組みに対していただいたという事で、常に前を向き頑張っていたいただいた村民、役場職員、国や県や各自自治体からの応援職員、また支援をしてくださった方々、皆さんを代表していただいたものだと思います。

復興については、大変なことももちろんいろいろありましたが、普通では経験できないことを経験したと思っています。それは心にしっかりとしまっておきたい。この復興に携わったことで、新たな思いも深まりました。

特にこの原発事故に対しては、百人百様の考え方があり、どれもが正しいという中で、決断していかなければなりません。多様な考えに折り合いをつけ前に進む、加害者・被害者の関係を一旦

置いて村や村民にとって実を取っていく考え方、村民も職員も、共に考えてくれました。このような事故は二度とおこってほしくないし、我々のような経験は誰にもしてほしくない。そのためには、ここから何を学び、次の世代にバトンタッチしていくかが一番大事だと思います。一言で言えば「成長社会から成熟社会へ」「お金の世界から生命の世界、心の世界へ」ということになるとかと思っています。



復興大臣感謝状贈呈
被災3県の元自治体の長として
菅野典雄さん(佐須)

復興大臣感謝状贈呈 被災地域の事業者として

刃物の館やすらぎ工房
二瓶信男代表(福島市)
二瓶貴大さん(大倉)



飯館から刃物文化を発信

(貴大さんのお話)飯館工場は今年の9月で開所から丸4年になります。種類にもよりますが月に1000から2000本の包丁を生産し、メンテナンスもしています。

感謝状のお話をいただき、私達は被災の当事者ではなく、まだ何も復興に貢献できていないとお伝えしましたが、それでもおっしゃっていただいたので、父の功績としてお受けすることにしました。やっていくことに変わりはありませんが、ふさわしい仕事をしていかなければと考えています。飯館はよい所で、妻も私も村の皆さんに助けられています。

これからは雇用を生み出したり刃物でイベントを開いたりもしていきたいと考えています。村に来てもらう機会をつくりながら、刃物文化を伝えたい。研究家の方達が中心となっていて、この飯館工場の敷地で古代の「たたら製鉄」を再現してみようという構想も進んでいます。

(信男代表のお話)俺ではないです。若い人達が一生懸命やっています。飯館村に来た時、私らが一生懸命やることで村にいい影響が生まれればと話しましたが、少しずつでもそうならいいから、本当にうれしい。これからはもともとと頑張りたい。私は、小さい頃から「まで(＝までい)にやれ」と教えられて仕事をしてきました。そのことにも、村との深いつながりを感じています。

科学的なデータで語る

全村避難となり、仮設住宅の管理人をしていた友人が、訪問者に向けて語り部を始めたことがきっかけでした。依頼があれば、私も村民として協力をしよう、と、県が主催する語り部の研修を受け、学び始めました。情報の共有は大切で、そのためには人材を育成することも必要です。さらには語る人のネットワークも大事だと考えています。

原発事故の影響について、震災後、世の中は両極端の考えを引きずっていました。避難指示が解除になっても噛み合わない部分がありました。私は語り部の活動を通して、感情的にはなく、今の飯館の情報を科学的に伝えてきました。震災直後から、我が家の作物や植物の線量を測り続けてきた経験を踏まえて、「採って測って考える」ことの大切さを伝えていきます。実際に測ってみてこそ分かることがあります。

私は保健師です。平成24年からは福島県立医科大学で健康調査の仕事をしていきますが、医療職において「データを測ること」は基本です。科学的な事実を元にどう考えるか、知識が生活を豊かにしてくれることを、特に若い人に伝えていきたいと思っています。思い込みではなく、実際のデータを理解することで、総合的な判断ができるようになっていくと考えています。



復興大臣感謝状贈呈
震災伝承の語り部として
菅野クニさん(宮内)